

様式第2（第9条関係）

政 務 活 動 費 成 果 報 告 書

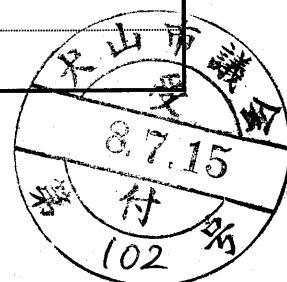
令和 8 年 7 月 15 日

犬 山 市 議 会
議 長 大沢秀教 様

議員名 畑 竜介

下記のとおり、行政視察の成果を報告いたします。

(1) 年 月 日	令和8年7月13日(月)～令和8年7月14日(火) (1泊 2日)
(2) 場 所	山口県岩国市
(3) 形 態	会派 (創犬会) : その他 ()
(4) 内 容	別紙
(5) 成 果 ・ 提 言	別紙



山口県岩国市「錦帯橋の鶺鴒」について

【内容】

山口県岩国市を訪問し、錦帯橋鶺鴒保存事業及び遊覧船事業について視察を行った。

岩国市では、平成25年まで民間会社が実施していた鶺鴒事業を、市が鶺鴒保存事業として引き継ぎ、その一部を岩国市観光協会へ委託している。また、遊覧船事業については観光協会が独自事業として運営し、「伝統文化の保存」と「観光事業」を明確に役割分担していることが特徴である。

さらに、鶺鴒の飼育施設「古香 鶺鴒の里」を整備し(1億4千万円防衛省の補助金)、鶺鴒の飼育・保存・展示・教育を一体的に行うなど、文化継承と観光振興の両立を図っている。

【2】視察成果

1. 保存事業と観光事業を明確に分担した運営体制

岩国市では、市が鶺鴒保存事業を実施、観光協会が遊覧船事業を運営という役割分担が明確であった。

文化財としての保存責任と観光事業としての収益確保を切り分けることで、それぞれの目的を明確化し、持続可能な運営体制を構築している。

2. 鶺鴒匠の業務負担を軽減する分業体制

犬山市では鶺鴒匠が、鶺鴒の飼育・健康管理・訓練・腰蓑等の製作・鶺鴒の実施まで幅広く担っている。

一方、岩国市では鶺鴒の飼育・管理を会計年度任用職員3名が365日体制で行っており、鶺鴒匠は鶺鴒技術の継承や実演に重点を置くことができる体制となっていた。

専門性に応じた役割分担により、鶺鴒匠の負担軽減と技術継承の両立を図っている点は大変参考となった。

3. 段階的で明確な人材育成制度

岩国市では資格基準が文書化されており、仲乗り→艀乗り→鵜匠見習い→鵜匠という段階的な育成制度が整備されている。

昇格にあたっては、技量・品格・知識・指導者の推薦・本人の意思確認などを総合的に判断しており、技術継承を制度として支えている。また、遊覧船船頭についても別の資格基準が定められ、安全運航や接遇を重視した育成が行われていた。

4. 多様な担い手を活用した人材確保

犬山市では鵜匠は市職員であるが、岩国市では会社員など本業を持ちながら副業として鵜匠を務めている。

また、市職員の兼業も認めており、現在は市職員1名が鵜舟船頭として活動している。

求人についても知人紹介や求人誌、地域への募集など柔軟な方法を採用しており、人材確保の裾野を広げている点が印象的であった。

5. 「古香 鵜の里」による保存・教育・観光の一体化

鵜の里では、鵜の飼育・展示・教育・観光を一体的に実施している。鵜飼開催期間だけではなく、一年を通じて鵜や鵜飼文化に触れられる施設となっており、伝統文化の継承と観光資源としての活用を両立していた。

【3】犬山市への提言

1. 鵜匠が技術継承に専念できる体制づくり

犬山市でも、鵜の飼育や日常管理について補助職員等の活用を検討し、鵜匠が本来の役割である鵜飼技術の継承や後継者育成に専念できる体制づくりを進めるべきである。

2. 人材育成の見える化と制度化

岩国市では資格基準や育成段階が明文化されていた。

犬山市でも、鵜匠や船頭の育成過程を整理し、必要な技術や経験年数

などを可視化することで、計画的な後継者育成につながると考える。

3. 保存・教育・観光を一体化した施設整備

当市の鵜舎は老朽化も進んでいる事から、岩国市の「古香 鵜の里」のように、鵜飼開催期間以外でも鵜や伝統文化を学び、体験できる施設は、犬山市が進める「かわまちづくり」とも親和性が高く、将来的な検討課題として研究する価値がある。

4. 多様な担い手確保の研究

犬山市と岩国市では歴史的背景や制度が異なるため単純な導入は難しいものの、副業や兼業を含めた多様な人材が伝統文化の継承に関われる仕組みについて研究することは、将来的な担い手確保の選択肢となり得る。

岩国市小瀬かわまちづくり計画について

【１】岩国市 小瀬かわまちづくり計画概要

山口県岩国市を訪問し、「小瀬かわまちづくり計画」について視察を行った。

小瀬地区は人口593人(小学生7人)、高齢化率58.01%と人口減少・高齢化が進む地域であり、河川空間の利活用や地域活性化が課題となっていた。

そこで、国の「かわまちづくり支援制度」を活用し、河川空間とまちの一体化・歴史資源の活用・広域交流の拠点形成を基本方針として整備を進めている。

整備後は地域住民が主体となる「小瀬かわまちづくり協議会」が運営を担う予定であり、地域主体による持続可能なまちづくりを目指している。

【２】視察成果

１．国の制度を活用した段階的なかわまちづくり

小瀬川流域では、下流部から順次河川整備が進められており、今回の整備区間についても、国土交通省から「かわまちづくり支援制度」の活用について提案を受けたことが事業のきっかけとなっている。

地域の課題と国の支援制度を結び付けることで、河川管理者である国と岩国市が役割分担しながら事業を進めており、地域にとって必要な整備を効率的に実現する仕組みとなっていた。

２．地域主体による運営体制を整備前から構築

岩国市では施設整備よりも先に、「小瀬かわまちづくり協議会」を設立し、自治会・社会福祉協議会・PTA・地域団体・歴史関係者など地域全体で運営する体制づくりを進めていた。

３．若い世代を意識した組織づくり

協議会には小学校PTA、中学校PTAも構成員として参加している。

これは単にイベント運営を担うためではなく、次世代へ活動を引き継ぐことを目的としており、若い世代が早い段階から地域活動に参画する仕組みとなっていた。

4. 地域資源を活かしたかわまちづくり

整備内容は大規模施設ではなく、河川空間・歴史資源・渡し場跡・西国街道など既存資源を活用している。

ハード整備だけではなく、ウォーキングイベントや歴史学習などソフト事業と組み合わせることで、地域の魅力向上を図っている。

5. 国と市の役割分担が明確

河川管理施設などは国が整備し、岩国市は案内看板・モニュメント・駐車場など地域に密着した整備を行う。(整備費用は国が9割、市が1割)

6. 整備後を見据えた維持管理

日常管理については、地域自治会が草刈りなどを担うことを前提としており、整備後も地域が関わり続ける仕組みが組み込まれていた。

【3】犬山市への提言

1. かわまちづくりは「整備」ではなく「運営」が重要

施設整備だけでは地域活性化にはつながらない。

犬山市でも、かわまちづくりの計画段階から整備後の運営主体を明確にしておくことが重要である。

2. ハードとソフトを一体で進める

河川空間を整備するだけではなく、

- イベント
- 歴史学習
- ウォーキング
- 観光

などソフト事業を同時に展開することで、かわまちづくりの効果を最大限に発揮できる。

3. 犬山らしい地域資源との連携

犬山市では、

- 木曽川
- 木曽川鵜飼
- 国宝犬山城
- 城下町
- 犬山口駅周辺整備

など、多くの観光資源が近接している。

かわまちづくりを単独事業として考えるのではなく、それらを面的につなげることで、滞在時間の延長や回遊性向上につなげることが重要である。